様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ６ 日現在

機関番号：１３７０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０４２８

研究課題名（和文）現代アイルランド語におけるオペレーターの性質の解明に関する研究

研究課題名（英文）A Study on Elucidation of the Properties of Operators in Modern Irish

研究代表者
牧　秀樹（MAKI, HIDEKI）

岐阜大学・地域科学部・准教授

研究者番号：５０３４５７７４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本調査は、アイルランド語の演算子の諸特性を解明した。アイルランド語には、(A)WH構文、(B)分裂構文、(C)埋め込み話題化構文などの、演算子移動を含む構文があり、(A)に関し、(i) 2種類の[+Q] COMPsがあり、(ii) 付加wh句は、容態クラスと理由クラスに分類され、(B)に関し、(i) CPとAPが分裂文化でき、(ii) NP分裂文は、6チェインパターンが可能であるが、それ以外の範疇は、2チェインパターンのみが可能であり、(C)に関し、(i) 埋め込み話題化認可主要部は、言語間で異なり、(ii) 付加詞への付加の禁止は、内部からの併合による場合のみ禁じられることを、明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This research elucidated properties of operators in Irish. There are some constructions that involve operator movement in Irish, such as the wh-construction, the cleft construction, and the construction with embedded topicalization. The research made it clear, (A) for the wh-construction, (i) that Irish has two types of [+Q] COMPs, and (ii) that adjunct wh-phrases in Irish are categorized into two groups: the manner class and the reason class, (B) for the cleft construction, (i) that CPs and APs can be clefted in Irish, unlike English or Japanese, and (ii) that while NP clefting allows six chain patterns with one embedded clause, clefting of the other categories only allows two chain patterns, and (C) for the construction with embedded topicalization, (i) that the head positions in charge of embedded topicalization are parameterized among languages, and (ii) that the ban against adjunction to adjuncts only disallows adjunction to adjuncts by way of internal merge.

研究分野：人文学

キーワード：chain　cleft　factive　Irish　movement　resumption　subject　wh-in-situ

１．研究開始当初の背景

理論言語学上、人間言語における演算子(operator)の性質と行動は、一貫して、重要な研究テーマとなってきた。具体的には、文中に1つwh句(wh-operator)がある場合、表面上、英語では、文頭に移動し、また、日本語では、その必要がない。一方、Bošković (2000)は、フランス語では、そのような環境では、wh句は、文頭に移動しても、しなくても、構わない場合があると指摘している。ただし、それには、一定の制限があり、主文に限定されている。

ここで私が取り上げる研究テーマの一つは、文中に1つwh句(wh-operator)がある場合、埋め込み文内に生成されたwh句が、wh-移動言語の中で、その場に留まることができる言語があるかということである。この調査は、国内・国外における研究において、詳細になされていない。

私のもう一つの研究テーマは、非項wh句（付加詞wh句）のchain構成に関する調査である。現代アイルランド語（以下、アイルランド語）において、項wh句のchain構成は、McCloskey (2002), Maki and Ó Baoill (2011)でかなり詳細になされたが、非項wh句のchain構成はMcCloskey (2002)が触れているが、詳細には調査されていない。

私のもう一つの研究テーマは、アイルランド語のcleft構文におけるcleft可能な句に関する調査である。Chomsky (1977)以来、英語のcleft構文は、詳細に調査がなされてきたが、アイルランド語のcleft構文の調査は、皆無であり、英語・日本語のcleft構文との共通点・相違点は、全く解明されていない。

したがって、上記3点の研究課題は、国内・国外の研究において、その重要性は、明確であるものの、いまだに、未調査であるという位置づけであり、これらを解明することは、理論言語学における原理とパラメターの理論に重要な貢献をすると考えられるので、この調査を開始した。

２．研究の目的

本研究の目的は、現代アイルランド語におけるオペレーターの性質の解明で、その具体的目的は、以下に示される3点である。

1. アイルランド語におけるwh-in-situの分布の調査
2. アイルランド語の非項wh句（付加詞wh句）のchain構成に関する調査
3. アイルランド語のcleft構文におけるcleft可能な句に関する調査

３．研究の方法

Queen’s University Belfastの Dónall P. Ó Baoill 名誉教授から、母語話者によるアイルランド語データの判断を得、共同で、新たに発見されたデータに基づいて、その言語学的意義を探る方法。

４．研究成果

査読付きジャーナルに論文が3本掲載された。また、アブストラクトに査読があった論文は、予稿集に6本掲載された。学会発表は、合計6回行った。

第一の研究テーマ（アイルランド語におけるwh-in-situの分布の調査）に関しては、以下の成果があった。文中に1つwh句(wh-operator)がある場合、表面上、英語では、文頭に移動し、また、日本語では、その必要がない。一方、Bošković (2000)は、フランス語では、そのような環境では、wh句は、文頭に移動しても、しなくても、構わない場合があると指摘している。ただし、それには、一定の制限があり、主文に限定されている。本調査では、wh-移動言語であるアイルランド語において、文中に1つwh句(wh-operator)がある場合、埋め込み文内に生成されたwh句が、その場に留まることができるかどうかを調査した。その結果、補文においてwh句が移動しないでよいだけでなく、移動の障害となる様々な領域（複合名詞句、wh節、付加詞節）においても、移動せずに、その場に留まることができることが明らかになった。

このアイルランド語の事実と、英語、フランス語、中国語のwh句の諸性質を比較すると、次のことが言えることが分かった。つまり、wh句を認可する要素であるCOMPは、2種類あり（仮に、強と弱と言う。）、また、このCOMPが、文構築の際に、導入されるタイミングにも、2種類あり（仮に、早と遅と言う。）、これらのコンビネーションによって、言語を類別することが可能になるということである。具体的には、(1)強・早のCOMPを持つ言語は、英語、フランス語、アイルランド語であり、(2)強・遅のCOMPを持つ言語は、フランス語であり、そして、(3)弱（早・遅の区別は、決定できない）のCOMPを持つ言語は、中国語とアイルランド語である。ここで特別なのは、アイルランド語のみが、一言語の中に、強COMPと弱COMPの2種類のCOMPを有すると言う事実である。

第二の研究テーマ（アイルランド語の非項wh句（付加詞wh句）のchain構成に関する調査）に関しては、以下の成果があった。アイルランド語の非項wh句 *cad é an dóigh* ‘how’を詳細に調査し、新たに発見されたデータより、以下のことが明らかになった。第一に、得られたデータは、Lasnik and Saito (1992)の「付加詞wh句は、LFにおいのみ変更/痕跡を作る」という主張を支持すること、第二に、付加詞wh句は、均一の範疇を構成せず、2種類の範疇（howタイプとwhyタイプ）に分かれること、第三に、非正規項演算子（how, why, そして、比較構文に現れる演算子）は、

アイルランド語においては、均一の範疇を構成しないということ、そして、第四に、アイルランド語には、2 種類の COMP（英語で見られるものと中国語で見られるもの）が存在するということである。

第三の研究テーマ（アイルランド語の cleft 構文における cleft 可能な句に関する調査）に関しては、以下の成果があった。調査の結果、NP（名詞句）と PP（前置詞句）だけでなく、CP（補文化標識を伴う節）と IP（補文化標識を伴わない節）も cleft 可能であることが分かった。この事実をきっかけに、さらに、以下のことも分かってきた。(i) アイルランド語では、IP が主語になりえ、cleft されること、(ii) 目的語の位置にある節からの wh 句の抜き出しは可能である一方、主語の位置にある節からの wh 句の抜き出しは不可能であること、(iii) 補文化標識 go/gur を持つ一定の構造内部に出現する残余代名詞は、アイルランド語に顕著に見られる残余代名詞ストラテジーでは救済できないこと、(iv) wh 句を先頭とするチェインパターン (aL, that, RP) (RP = 残余代名詞)が、主語の位置にある節から wh 句を抜き出している例において可能であることである。これらの発見は、以下のことを示唆する。(i) アイルランド語の文法には、残余代名詞の出現に関して、アイルランド語に特有の条件を持っていること、(ii) アイルランド語においては、主語の位置は、適正統率される位置ではないこと、(iii) 人間言語は、IP が主語として機能することを許容し、補文化標識と述語（動詞と時制）の間に一致があるようであること、(iv) wh 句を先頭とするチェインパターン (aL, that, RP)は、Maki and Ó Baoill (2011)が最初に可能であることを示唆したものであるが、移動を含む構文において、明らかに存在するチェインパターンであることである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 9 件）

A. 査読付きジャーナル

[1] Ó Baoill, Dónall P. and Hideki Maki (2015) “Puzzles with the Subject Position in Irish,” *English Linguistics* 32.1, 102-113.

[2] Maki, Hideki and Dónall P. Ó Baoill (2014) “Clausal Arguments in Irish,” *English Linguistics* 31.2, 545-562.

[3] Maki, Hideki and Dónall P. Ó Baoill (2014) “Embedded Topicalization in Irish,” *English Linguistics* 31.1, 130-148.

B. アブストラクトが査読があり、予稿集に掲載された論文

[1] Maki, Hideki and Dónall P. Ó Baoill (2014) “The Cleft Construction in Irish,” *JELS* 31 (Papers from the Sixth International Spring Forum of the English Linguistic Society of Japan), 338-344.

[2] Ó Baoill, Dónall P. and Hideki Maki (2014) “Irish [+Q] COMPs,” *JELS* 31 (Papers from the 31st Conference of the English Linguistic Society of Japan), 123-129.

[3] Ó Baoill, Dónall P. and Hideki Maki (2014b) “Extraction from the Complement Clause of the Factive Predicate *Is Trua Le* ‘To Regret’ in Irish,” *Proceedings of the 149th Meeting of the Linguistic Society of Japan*, 290-295.

[4] Ó Baoill, Dónall P. and Hideki Maki (2014a) “Puzzles with the Subject Position in Irish,” *Proceedings of the 148th Meeting of the Linguistic Society of Japan*, 140-145.

[5] Ó Baoill, Dónall P. and Hideki Maki (2013) “Cad é an Dóigh ‘How’ in Irish,” *Proceedings of the 147th Meeting of the Linguistic Society of Japan*, 524-529.

[6] Maki, Hideki and Dónall P. Ó Baoill (2013) “Clausal Arguments in Irish,” *Proceedings of the 146th Meeting of the Linguistic Society of Japan*, 264-269.

〔学会発表〕（計 6 件）

[1] Ó Baoill, Dónall P. and Hideki Maki (2014b) “Extraction from the Complement Clause of the Factive Predicate *Is Trua Le* ‘To Regret’ in Irish,” *The 149th Meeting of the Linguistic Society of Japan*. Ehime University, November 15, 2014.

[2] Ó Baoill, Dónall P. and Hideki Maki (2014a) “Puzzles with the Subject Position in Irish,” *The 148th Meeting of the Linguistic Society of Japan*. Hosei University, June 7, 2014.

[3] Ó Baoill, Dónall P. and Hideki Maki (2013b) “*Cad é an Dóigh* ‘How’ in Irish,” Poster Session. *The 147th Meeting of the Linguistic Society of Japan*. Kobe City University of Foreign Studies, November 24, 2013.

[4] Ó Baoill, Dónall P. and Hideki Maki (2013a) “Irish [+Q] COMPs,” *The 31st Conference of the English Linguistic Society of Japan*. Fukuoka University, November 9, 2013.

[5] Maki, Hideki and Dónall P. Ó Baoill (2013b) “Clausal Arguments in Irish,” *The 146th Meeting of the Linguistic Society of Japan*. Ibaraki University, June 15, 2013.

[6] Maki, Hideki and Dónall P. Ó Baoill (2013a) “The Cleft Construction in Irish,” *The Sixth International Spring Forum by the English Linguistic Society of Japan*. The University of Tokyo, April 27, 2013.

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
http://www.geocities.jp/makibelfast/index.html

６．研究組織
(1)**研究代表者**

牧　秀樹 (MAKI HIDEKI)
岐阜大学・地域科学部・准教授
研究者番号：50345774

(2)**研究分担者**

なし

(3)**連携研究者**

なし